

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「人類社会の進化史的基盤研究(3)―他者―」 2013年度第2回(通算第7回)研究会

日時:2013年6月30日(日曜日)午後1時~7時頃

場所:マルティメディアセミナー室(306室)

報告者:

1. 足立薫(AA研共同研究員・京都産業大学)
2. 床呂郁哉(AA研)

内容

1. 平衡、自然の調和、システム(足立薫)

生態系の平衡

群集生態学はある生態系に、「何がどれくらいある・いる」のかを知ることが目的とし、生物種の数、個体数、生物量がその指標となる。生態系が平衡状態であるならば、資源の供給量はちょうど需要量と釣り合い、種間競争が群集を形作ると考えられる。平衡の生態学はニッチ集合(assembly)モデルで表現され、生態系は競争関係(競争と共存の動的平衡関係)の調整作用の結果としてある。ここでは「いつでもちょっとだけ足りない」資源を、調和的に分け合うことで、全体としての自然が成り立っていると考えられ、ニッチで満たされた世界としての生態系=自然の調和概念が成り立っている。

それに対して、非平衡を自然の本来の姿と考える場合、生物が利用する資源は常に豊富で余剰分が存在し、人的な攪乱や災害、捕食圧が生物群集を決定づける重要な要因となる。このような生態系の見方を支える理論の一つが、ランダム(null model・中立理論)仮説、分散集合モデルである。Hubbel(2001)は Unified Neutral Theory of Biodiversity and Biogeography(UNTB)を構想し、遺伝子の中立説とのアナロジーから生態系の種の構成や個体数は、「偶然に」決まっていると主張した。生態系を決定づけるのは、偶然性や歴史性、ランダムな分散、確率的・局所的な絶滅である。局所群集では競争が起こっていても、生息地間の移動分散でゆるやかに相互作用するメタ群集のレベルでは競争が成立せず、進化や生物多様性は、メタ群集のレベルで考えるテーマとなる。

平衡と非平衡の概念は相補的であり、両者を統合しようとする試みとして、Tilmanの資源=競争理論があげられる。TilmanによるZNGI(ゼロ・ネット・成長・アイソクライン)理論は、ニッチを自然環境に配置された埋められるべきスロット、穴ではなく、ベクトルとして考えることによって、競争関係のもたらす結果が初期条件によって変わる歴史性のある生態学のモデルを提供する。Eliot(2011)によれば、UNTBの系譜に連なるTilmanの競合理論は、Ceteris paribus(他の条件が等しいならば)という非現実的な限定が必須

の理論であり、説明されることの全体性が成立していないタイプの特殊な科学理論であるとされる。

システムの平衡

河本（1995）によれば、システム理論の歴史は以下のように整理される。

第1世代システムは、有機体のシステムを構成要素間の「関係」で表し、開放性の動的平衡系として描かれる。動的平衡が維持されホメオスタシスの機構によって自己維持されるため、時間を変数としては無視でき、規則的な関係にしたがってシステムが作動して恒常的な「関係」が構成されるように錯覚することになる。そこでは動的平衡の結果でしかないはずの「関係」が実体化され、様々な現象の根拠となる「関係」を規則構成的に解明することが主要な課題となる。

第2世代システムは、動的非平衡システムと呼ばれる自己組織化系である。たとえば、結晶をシステムとし、溶液をシステムの境界として、増大しつづける結晶を自己組織システムとしてとらえる場合であり、システムの境界は、システムと環境とのインプットとアウトプットによって決まり、観察者が空間内に判別している境界とおおむね重なっている。初期条件を定めて最終結果を演繹するのが、近代科学的な法則設定によるコード化であるが、自己組織化では初期条件を一定にしても、結果が一義的に定まらず、確率的偶然によってしか結果は決まらないため、コード化の限界が示される。動きつづけるシステムを近代科学的手法では、特定の時点を設定し、それに対応した特定の状態が定まるようにコード化する。特定の時間点に対応する状態記述をならべるのは、アニメーションを作るようなもので、観察者には動きつづけているようにみえるが、システム自体が動きつづけていることを示さない。第1世代の考え方では、システムの境界は、観察者の視点から導入されているが、第2世代の視点をとると、システムそのものにとっての境界を指定するようにシステムの規定を導入することができる。ただし結晶化のシステムでは、ビーカーの壁が外的条件としてシステムを支えている。第3世代のオートポイエーシス・システムではシステムの境界は、環境との相互作用によって決まるのではなく、むしろ自分で産出した壁によって区切られシステムが自らの境界を自分で産出するようになる。

非平衡の生態学は、「法則」で説明できる「局所」に対して、捉えることができない「全体」を措定し、必ず起こる例外や逸脱を重要な要素とする。決して届かないがいつでもそこにあるという意味での全体性は、ごくごくまれな機会を通じて「他者」として生き物の前にその姿を垣間見せる。そこそこの局所的全体性の中でそこそこうまくやっている生き物に見通せる範囲には、決して全貌を現さない真の全体性こそが、言語や意識によらない生き物本来がもつ「他者」の在りようなのではないだろうか。

2. 非人間の〈もの〉が他者となる時：真珠貝、機械のアニミズム、野性のチューリング・テスト（床呂郁哉）

本報告では非人間の存在者をめぐる他者の問題を扱った。まず本報告の問題意識に関して述べる。これまでの人文諸科学系の分野における他者論においては、「他者」の外延として（例外はあるが）ともすると人間（同種他個体）が想定されがちな傾向があったと言える。しかしながら、本研究会におけるマクロな進化史を含むより根源的・原理的な観点からすれば、各種の〈非人間〉の存在者が他者となりうる側面をより積極的に考察の対象に入れるべきであろう。ここで言う〈非人間〉とは人間（ヒト）以外の動物や「もの」（自然物、人工物を含む）などを指す（以下、「動物」「もの」などという場合、便宜上ヒトを除くこととする）。本報告の第二の問題意識としては、（床呂郁哉・河合香吏（編）2011『ものの人類学』（京都大学学術出版会）において既に示唆的に論じた点でもあるが）人間／非人間の境界の可塑性・可変性という論点がある。この点には具体的には人間と〈もの〉の境界のゆらぎ、エージェンシーを発揮する〈もの〉などを含む。総じて本報告では、非人間の「もの」（動物、自然物、人工物など）を含んだ他者論はいかに構想可能かという問題を扱った。

次に本報告で扱う「他者」に関して述べたい。他者論において他者の定義を述べる際に、しばしば自己と他者は循環的に規定されることがある。すなわち自己とは他者でないもの、他者とは自己でない存在という規定である。しかし、こうした自己／他者の二項の循環的規定で抜け落ちるのは「環境」という第三項であると考えられる。つまり「非自己（自己でないもの）」のうちには他者と環境の両者が含まれるものとして考えたい。つまり「非自己」ならば自動的に他者というわけではなく、本報告では他者のうち広義の社会的インタラクションや交渉が可能の可能性に対して開かれている対象を「他者」として考えたい。

更に本報告では狭義の他者（これを便宜上、「他者Ⅰ」と呼ぶ）と広義の他者（これを「他者Ⅱ」と呼ぶ）を区別して概念化した。ここで言う「他者Ⅰ」とは、社会的インタラクション・コミュニケーション・交渉・対話可能な対象のうち、比較的、応答・返答可能性が明瞭であるように見え、自己と相手の関係が比較的、対称的・相互的である（ように見える）他者のことである。たとえば人間にとっての（生きている）他人だとか、ある生物個体にとっての同種他個体（とくに生きている同種他個体）などが典型的である。これに対して本報告で言う「他者Ⅱ（広義の他者）」とは、当事者（自己）にとって広義の社会的インタラクションやコミュニケーション、交渉、対話、呼び掛け等の試み（トライアル）が有意味だと想定・推定されうるような対象を指す。他者Ⅱには自己と相手との関係が（とくに外部の観察者の視点から見て）必ずしも対称的・相互的ではない場合を含むものとして規定した。このように定義することで、たとえば人形や路傍の石、無機物などのように通念的な意味では人間の側からの呼びかけ・働きかけに対する返答・応答可能性が保証されていない対象や、「いまここ」の場には物理的に存在しない「非在の他者」としての死者、神・

霊などの対象なども広義の「他者」の外延に含みうることを論じた。

続いて本報告では M.モース以来の人類学において「ひと」と「もの」の境界の可変性を論じる系譜が存在してきたことを再確認した。更に近年の生物学・認知科学・人類学等において、知性・心やエージェンシーに関する脱人間中心主義的な議論の展開を紹介した。この文脈において、広義のエージェンシーや社会的な相互作用（交渉・対話）の可能性は、決して人間や一部の「高等な」生物だけの占有物ではないことを指摘し、場合によっては人工物や機械などの存在者でさえも、人間にとって交渉可能な他者として立ち現われることを具体的な例を挙げて論じ、こうした現象一般を「機械のアニミズム」と名付けた。

また最後に、このような「他者」の外延の可変性、すなわち状況に応じて非人間の存在者（動物、自然物、人工物）を含み込む形で「他者」の外延が拡張するという現象をどう考えるかについて、数学者 A.チューリングによる「チューリング・テスト」のアイデアを補助線として検討を行った。その結果、人間が未知の対象を含む任意の対象と相互作用のトライアルを通じて、交渉可能な「他者」の外延が再帰的・行為遂行的に決定されてくる過程を「野性のチューリング・テスト」と名付けて概念化しうることを提唱した。